

診療所のすぐ近くに住んでいたT君が久しぶりに受診した。たいした症状はなく、軽い風邪であった。彼は小学生の頃から「キノコ博士」として有名で、大学は農学部に進み、キノコの研究をした。卒業して、福島県浪江町に土地を購入し、様々なキノコの栽培に取り組んでいた。他所ではあまり栽培されていないキノコの栽培に挑戦し、町役場にも相談しながら販路を拡大中だった。町も「キノコ栽培で町おこしを」と協力し、福島民報新聞に大きな記事として報道されたことがある。

その彼に放射能汚染のことを聞いてみた。彼は地震・津波と原発事故の頃は仙台にいたが、農地は飯館村に近く、現地の人びとはちりぢりに他所に避難し、キノコ栽培はできない状態だという。東京電力に補償について電話で問い合わせたら、「キノコは補償対象品目に入っていない」との回答だったという。「明日は浪江町へ荷物を取りに行く」というので、放射能測定器を貸した。

電力会社は原発事故が起こる前には札東の力で、経産省などの関係高級官僚、国や県や地方自治体の政治家、大学の原子力関係の学者、マスコミやそこに頻繁に登場する文化人などを「総動員」して国民を原発容認の方向へ導いた。事故後は、東京電力の被害者の軽視・無視の姿勢が目立った。土下座は無料であるから何度でもしようが、金がかかる補償となると違う。9月12日には約6万人の被害者あてに10種類の書類を送りつけた。「請求書類」は60ページ、「請求のご案内」は156ページ、専門用語だらけの難解なものらしい。9月11日には新宿を中心に全国各地で反原発デモが行われ、子ども連れの女性も多かった。警察や公安警察の過剰な取り締まり・監視の他に、いわゆる右翼の旗や街宣車が多く見えた。ここにも札東の力を感じたのは小生の妄想だろうか。

原発事故以来繰り返された枝野官房長官の記者会見は、戦前の大本营発表に似ていると思った。「直ちに健康に影響を及ぼす数値ではない」は弁護士でもある彼の巧みな表現として有名になった。戦前の大本营は常に「カクカクタル戦果」を繰り返し、敗走を転進、全滅を玉砕と言い換えた。ヒロシマに特殊爆弾がキノコ雲を作って落とされ、次いでナガサキにも落とされ、敗戦は終戦と言い換えられた。その後、日本は「カクカクタル経済復興」を成し遂げたといわれている。その経済復興には朝鮮やベトナムの人びとの犠牲が隠されていると思う。

原発事故後、一部の御用学者が「放射能、たいして怖くない」という趣旨の講演を各地で行っている。戦前の「米英恐るるに足らず」と同じであり、その論理内容は「年間〇〇ミリシーベルトまでの被爆の害はタバコや酒の害より軽い」というもので、皆なぜか同様である。子どもは放射線に大人より感受性が高いし、タバコとも酒とも無縁である。子どもを対象とした、より短期間のコホート研究、あるいは子どもの白血病など特定の病気の症例対照研究、それと妊娠動物や生まれて間もない動物への放射線照射の影響についての実験データなどが重要である。それらは出さず、感度の低い疫学調査で確定的なことをいうのは意図的ニセ科学である。御用学者の講演会には医師会も後援団体になっていることがある。仙台市医師会報のある号には、論旨が前述したものと同様の講演要約が掲載されていたが、反対の主張の投稿も掲載されており、当医師会報の編集関係者の度量の広さを感じた。フクシマの原発事故は第二の敗戦だと思う。このままではヒロシマ原爆にナガサキ原爆が続いたと同様の不幸が再び起こる可能性が高い。目の前の偽りの安心に貢献するより、国民の将来の大きな不幸を防ぐことに医学界と医師会は貢献すべきだと思う。

(宮千代加藤内科医院、仙台市医師会報へ投稿 2011/10/12)